

Title	カプールの後半生
Sub Title	
Author	高橋, 誠一郎
Publisher	三田学会
Publication year	1910
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.3, No.1 (1910. 1) ,p.99- 110
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	雑録
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19100115-0099

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

全然改革運動の爲めに其精力を傾倒しつゝあるなり。殊に著しきは近頃政府は各方面各階級の論者が主張する改革論を蒐集して二個の浩澣なる黄書となし之を公けにせり。彼等は又印度を以て一の奴隸帝國なりとなし、印度人(予は彼等が「印度人」なる語を以て何を指示するやを知らず)は毫も政務に參與することを得ずと唱へ、大膽にもモレー卿の所謂改革なるものは何等の重要な改善を來すものに非ずと宣言せり。左れど事實は之に反し、印度土人の鞅掌する半島の行政事務は頗る多く、土民官吏の數は遙かに英人官吏の數を超へ、土民中の有力者は凡ての立法合議機關に其席を有し新計畫の企圖せらるゝに先ちて當然協議を受くるものなり。今やモレー卿は土民が最高行政府に入ることを許可したるのみならず。彼等に與ふるに歳出歳入の計畫を決定するの權を以てし、更に進んで行政、立法の範圍に付きても頗る廣汎なる部分を彼等の殆んど自由行動に委せり。故に該檄文の起草者が英國の印度統治に關して述べた

る所は皆荒唐無稽の謬論にして、苟くも相當の教育を受くるときは十五歳の幼者と雖も、尙之を口にすることゝ恥づるが如きものなりと云ふも敢て苛酷の言に非ざるなり。此可憐なる民族を保護して、不完全ながら其願望を達せしめ、不充分ながら其利益を擁護するものは英國人を措いて他に之を求む可からざるなり。種族、宗教、階級の相違より生ずる厭ふ可き紛争の外に超然として唯彼等全般の福利を増進せんが爲めに努力するものは英人を措いて他に之を求む可からざるなり、全力を傾倒して印度全民族の爲めに正義、自由、及び平等の擁護者となり、印度人と回々教徒との争鬭を防止し、農夫と地主との軋轢を緩和するものは英國人を措いて他に之を求む可からざるなり。然かも該檄文の起草者は之等の簡單明瞭なる事實に付きて何等の觀念をも有せざるものゝ如し。嗚呼濟度し難きは頑迷不靈の徒なるかな (終)

カヴールの後半生

高橋 誠 一郎

(一) ノワラ(Novara)の戦敗

兵燹僞屍を照して敗陣の夜色轉々悽愴たり。「萬事休せり、吾が名譽も亦」チャルス アルベルト(Charles Albert)王は側なるクルザノウスキー(Chizanowski)に向つて囁けり。火は青き舌を延して王の黒き毛皮と銀の刺繡も飾られたる外套を嘗めんとするにズランド(Durande)は打ち驚きて王を避けしめんとせり。「無用、余をして死せしめよ、此れぞ余が最後の日なり」。嗚呼今やピエモン(Piedmont)軍はテュムン(Turin)との聯絡を絶たれたるなり、百計既に盡きて最早何等の行動をも取り能ふ可き餘地なし。王はカドルナ(Cadorna)及びコッサト(Cossato)の兩將軍を擯將ラデツキー(Raddetzky)に派して休戦を請はしめたり。擯軍の元帥が此に對して提出したる條件は、ロンバルト軍の兵備を解かしむること、議會の協賛を待つことなくして直にセシア(Sesia)チシノ(Ticino)

兩河間の領土及びアレクサンドリヤ(Alessandria)の城堡を平和の締結まで擯軍に引渡すと、並にサボイ公(Duke of Savoy)を人質となすの二なりき。午後九時王は諸將諸侯を召し集めたり。夜は沈々たり、王の悲壯なる音調は四圍の闇冥を破れり。「諸君よ、余は伊太利の獨立の爲めに余自らを犠牲とせり、余は之れが爲に余の生命、余の王子、而して余の王冠をも提供し盡して餘す所なし、余は最早此の苦闘を續くこと能はず、余は今や避く可らざる結果となれる此後の平和に對し余の存在は一大障害たる可きを知るものなり。余は此に調印するを得ず。戰場に於て死に就くと能はざりし余は今吾邦家の爲めに最後の犠牲を供へんとす即ち余は茲に余が王冠を掛けて而して此を余が王子の爲めに殘すものなり」。時に一八四九年三月廿三日。伊太利建設者の一人なるピットリオ エマヌエル(Vittorio Emanuele)は實に斯くの如きの時、斯くの如くして王位に即けるなり。熱誠溢るゝ雲霞の如き民衆に圍繞せられてアル

100 ベルト王が玉宮の殿廊に立ち、三色の旗を打ち振りつゝ、蒼生狂喜の中にフエデリコ スクロピス (Federico Sciopis) の草したる詔勅を述べ終りたる時の多望なる光景は今や夢の如く淡く消え失せてゼノア (Genoa) の愛國詩人ゴッフエルドフ マネリー (Goffredo Manelli) が「嗚呼同胞よ同胞よ、眼を覺せし伊太利は、額に羅馬の甲を着 (Hætelia Italia, L'Italia s'è desta Dell'elmo di Scipio S'è Cinta latesta:)」の歌も終に絶えたり、伊太利自ら衛る可し」の聲も此一敗と共に消えて伊太利の名は彼のメッテルニツト (Metternich) の謂ひけん如く唯だ一個地理學上の名稱として残らざるを得ざるに至りしなり。

新王ヴイットリヲ エマヌエレの前途は眞に常夜の闇なりき。立憲政治を布きてより日尙ほ淺くして官民共に未だ之に對して何等の經驗あるなく、議員は徒に叫び徒に狂ひて、此國家多難の秋に處する大決心なく、ノヴラの一敗に國威は全く三色の旗と共にラデツキーが鐵騎に蹂躪し終られ、

敵を前門に控へて然も頼む可き伊太利軍の軍紀は全く弛廢の極に達し、加ふるにこれを支ふ可き國庫は悉く涸渴し盡したり。然れどもエマヌエレは其父の優柔不斷なるに似もやらず果斷猛決、國民が「王と妃と皆獨乙人なり、大事終れり」と慷慨悲歌させる間に、彼は鐵の如き意志、火の如き熱血を以て、暗裡に光明を求め、死中に活を探らんとして努力せり。然りと雖も彼に明晰透徹の頭腦なく、臨機應變の才能なく、衆を酔はしむるに足るの華麗なし、畢竟するに彼は唯だ好個の武夫たるに過ぎず、彼にして其左右に達觀敏腕の宰相を得るなからんか、恐らく彼は赫々たる武名と而して慘憺たる最後とを史籍に残して伊太利は再び一八四九年の運命を繰り返さざるを得ざりしなるべし。

(二) カヴール (Cavour) 立
一八五〇年商務大臣サンタロザ伯 (Sant'arosa) 病を以て逝く。彼は其斷末魔に於て臨床の僧に向ひ懺悔を受けんことを乞ひぬ。僧は先づ彼がシツカルデー (Siccardi) 法案を遂行することに努力

したる點につき悔悛すべき旨を説きぬ。然れども彼は死の苦中に於ても尙ほ斷乎として之を拒み贖罪の禮を受けずして瞑目せり。此一事は伊太利民族の長く其勇氣を賞する所なるが、然も彼の死は之よりも更に重大なる事件を伴へり。伊太利建國の偉材カミロ カヴール (Camillo Cavour) が其後任としてピエモンの内閣に入るの機會を得たることは是なり。請ふ吾人をして少しく彼の前半生を回想せしめよ。

カヴールはピエモン王統の血を受けたる貴族の一門中に呱呱の聲を上げたり (一八一〇年)。彼は其幼時に於て傲岸不遜の資を有したりしが、稍長じてチュリンの兵學校に入るに及び先づ算數の學に頭角を表し、十六歳にして擢でられて築城副官 (Sublieutenant in the Engineer) となり、チャルスアルベルト王が尙ほ未だカリグナノー公 (Prince Carignano) たりし時其宮廷に仕へたることもありき。一八三〇年七月に於ける佛國革命の餘燄は伊太利半島をも燃きて劍を撫して立し志士も多

かりしが彼れ年二十二といふに青春の客氣制せんとして制する能はず、ピエモン政府の因循を痛詈し半島民族の腑甲斐なきを嘆じて縱論橫議往々四隣を驚すこともありしが、何時しか政府の忌憚に觸れて僻寒の地に左遷せられぬ。彼は間もなく職を抛つてヴェルセリ (Vercelli) 附近なる采邑に隠れ閑雲野鶴心長閑に耕耘の折々には古今の政策を講究しつゝ靜に時期の到るを待てるものゝ如し。彼は農事改良、陸路水路の開通等に盡瘁し其餘暇を以て好んで國外漫遊を試みたり。英國の政策は素より彼の愛好する所にして殊にサーロバートピール (Sir Robert Peel) が自由貿易の政略の如きは其最も嘆賞措く能はざりし所のものなりき。流水の如き日月はカヴールの春を流して十六歳の星霜は瞬く間に移りぬ。記憶すべき一八四八年は將に來らんとす。パイアス九世 (Pope Pius IX) 一度羅馬に自由を唱へしより革命の火は復も伊太利に燃えたり、マツジニー (Mazzini) は叫び、ガリバルディー (Garibaldi) は切りに狂ひ廻れるも、カヴ

ールは猶ほ平然として權園の裡に烟々炬の如き眼を以て天下を窺ひつゝありしが、彼は機を熟せるを見るや知友バルボー(Balbo)ドアゼグリア(D. A. Neglio)等と共に其主幹の下に雑誌「回天」(Risorgimento)を發行して四九年の危機に際し大勢力を振ひ、一方にはチユリン府を代表して國會議場に現れ熱心にドアゼグリアの内閣を援けて専ら共和黨と戦ひ、自由王權の主義を標榜して動くことなかりき。

カヴールは今サンタロザの後を襲ふて内閣に入らんとするに當り一條件を附せり。是れ即ち頑迷固陋の見を持し常に立憲自由の政治に反對せるクリストフラー(Christoforo Mameli)の免官になり、果然一ヶ月を出でずしてマメリーは其職をピエトル ジョイア(Pietro Gioia)に譲らざるを得ざりき。農商務大臣としてのカヴールが活動の第一着手は殖産興業を奨励して經濟上に於ける政府の干渉を避け徹頭徹尾自由貿易の主義を採用して以て國民の休養を計るにありき。一八五

一年四月十九日カヴール大藏大臣となり、同年五月には佛蘭西と新協約を締結せり。彼は時流に數歩を先んじたる大達識を以て直接間接國內百般が事務に就き大改善を企てたり。彼は頑冥者流の攻撃を意とせずして公債を發行し、租税を増徴し、鐵道布設を完成せり。彼は尙ほ他の伊太利諸州がピエモンに對する感情を融和せんとて大度量を以て未だピエモンに於ては市民權をも有せざる中央伊太利の亡命客フアリニー(Luigi Carlo Farini)を擧げて閣僚たらしめたり。

新政府の革命的傾向は固より佛蘭西國中の反動派の喜ぶ所に非ず、況んや伯林及び納維政府に於てをや。一八五一年十二月の Coup d'Etat を以て佛國皇帝の位に即きたるナポレオン三世(Napoléon III)は其隣邦に等しく反動的傾向あるを希望するの態度を示せり。當時ピエモンの識者間にもナポレオンの武斷主義に同情を寄するもの少なからず、革命家を以て自ら居る彼のドアゼグリア、ベルセジョ(Bersaglio)及びメナブリア(Menabrea)の如きも行政上多少國民の自由を拘束し、ル

イ ナポレオンの亞流を汲みて新聞紙及び選舉に制限を加ふることに賛せり。然れども獨りエマヌエル王は之を拒けて一八五一年十二月十日の日附を以て倫敦並に巴里なるピエモン公使に内訓を傳へて「王は他國の主權者が見て以て適當なりとなす所のものに向つて敢て干渉を試むることなかる可し、而して王は彼自身に於ても等しく其行動の自由なるべきを希望するものなり」との意を含ませしめ明に外國の干渉を排斥するの態度を取れり。此訓令は實にナポレオンの Coup d'Etat の後旬日ならずして發布せられたるものにして王の勇氣と獨立心とを示し得て餘りあるものなり。間もなくカヴールは公然議會に於て舊保守黨を脱するの宣言をなしラタデー(Rattazzi)ブツニア(Biffa)等と共に「Monarchy, the Constitution, independence, Civil and political progress」を標榜して「Corribio」なる自由主義の新政黨を組織せり。カヴール今や保守黨と斷てり、首相ドアゼグリアは

或る點に於ては確に保守主義の人にして其内閣も亦保守主義に傾けるものなり、此に於てかカヴールが大藏大臣としての地位亦動搖なきを得ざるなり。小波瀾は素より數の免れざる所なるべし。一八五二年四月十五日高等法院長ピネリー(Pinelli)逝く、而して其後任選定に際して總理大臣ドアゼグリアとカヴールとの間に意見の衝突を見たり。即ち後者はラツタジを推し、前者はボンコムパニー(Borcompagni)を擧げたるなり。選舉の結果ラタデーは五十票に對する七十四票の多數を以て當選せり。ドアゼグリア對カヴールの爭議は實に茲に其端を開きたるなり。一夕、ドアゼグリア邸に開かれたる晚餐會席上に於て、カヴールは平常主人の嫌惡せるラタジの上に話頭を向けて彼を揶揄せんと試みたり。宰相は直に濫面作りて顔をそむけつゝ聲荒く「余はラタジに關し何事をも聞くを欲せざるなり」と叫びたり。カヴールは之に對して何等の答をもなさずして、怒に輝く顔色赤く、突然其席を蹶つて立つよと見えしが

手荒く卓上の皿を床上に抛ちて憤然として室外に出でたり。彼は其手もて頭髮を掻きむしりつゝ後よりこれを制せんとして追ひかけ來りたるヲ、マルモラ (Lanarmor) に向つて狂人の如くに絶叫せり「彼は野獸なり、彼は野獸なり」と。カヴールは決然袖を拂つて大藏大臣の椅子を去りぬ。内閣は其最大有力者を失へり、ドアゼグリヲは直に書を捧呈して内閣の更迭を請へり。然れ共王は之を許さず、只だカヴールとフアリニーとを除きて他は悉く之を留任せしめたり。斯くしてカヴール對保守黨の對抗を生じ伊太利の政界に於ける慢性の病根とはなれるなり。

カヴールは一時政界より隱退して國外漫遊の途に着き佛英諸國を歴訪して一方には政務と關係を絶つを粧ひ、他方に於ては歐洲中原の政界を視察しつゝ暫く半島の雲行を眺め居たり。然れども半島の政界は氣力なく活氣なきドアゼグリヲをして處理せしむ可く餘りに多事多難なりき。王は此に於てか勢止むを得ず、カヴールを召して新内閣を

組織せしむることに決意せり。カヴールは最初の勅命を拒みたり。蓋し彼は己れ一度首相の地位に立たんか羅馬法王に對しては斷然たる措置を取らざる可らざるを知らばなり。「A free Church in a free State」は實に彼が十年來唱へ來りたる所なりき。然れども當時のピエモン王宮には尙ほ法王黨の勢力強くして到底満足に其説を實行すること能はざるなり。王は彼に誓つて獨力宮廷内に於ける感溺者流、殊に其最たる太后並に王妃を説破せんとせり。カヴールは愈よ決心を堅めたり。彼出でずんば半島二千萬の蒼生を如何にせん。彼は無條件を以て内閣組織の天命を拜せり。一八五二年十一月四日「大内閣」として知らるゝ新内閣はカヴールを首相兼大藏大臣にラタジヲを内務大臣として其成立を見るに至れり。

カヴール内閣が先づ其改革の手を下したるものは財政上及び經濟上の諸點にあり。當時ピエモンは財政は紊亂の極に達せり。一八四七年以後は國債の利子従前の六倍に及べり、而して商工業の發

達亦遅々として、就中運輸交通業の如きは最も幼稚なる状態にあり、其機關設備の如きは全く之を缺けり。然れども伊太利は由來貧弱國にあらず、唯だ天與の財寶の空しく觸るゝものなくして横はれるのみ、カヴールは此忘られたる富源を開拓せんとせり。觀よ、此方面に於ける彼が施設の如何に活潑々地なりしかを。彼は先づ英佛其他の各邦と最も有利なる條件を以て通商條約を締結し更に自由貿易の主義に基きて關稅改革を行ひ、鐵道を布設延長して有名なるモントセニス (Mont Cenis) 隧道の大工事を興せり。彼は次ぎに意を宗教の上に向けたり。洵にマキアベリー (Machiavelle) の謂ひたる如く、伊太利を亡したるものは寺院の勢力なりき。伊太利は常に二種の君主に服従したり、一は俗界の君主にして、一は此俗界の君主よりも更に大俗なる聖界の君主なりき。故に彼は銳意シツカルジヲ法案を強行して、宗教裁判所を廢し、僧侶の特權を廢して以て公正の法令を布かんとせり。彼は軍事上に於ては彼の普魯亞の

ビスマルク (Bismarck) がモルトケ (Moltke) を得たるが如く、ラマルモヲを得て軍隊組織の改造を企圖せり。カヴールは斯くの如き大英斷を以て百方伊太利統一の準備をなせりと雖も、然も彼は最も嚴格に最も忠實に一八四八年の憲法に服従し秋毫も其規定を犯すことをなざりき。之れぞ彼が其同時代の大産物ビスマルク公と趣を異にする點にして、終始、英吉利流の代議政體を實現せしめんとして怠らず「實力は法律を破壊す」と謂ふが如き亂暴なる思想は一回も彼の口に上り、頭腦に浮ぶとあらざりき。彼は憲法を棄てず、議會を棄てず。豈にピエモン國民克く彼を棄てんや。一八五三年の總選舉に於ては彼は優に狂猛なる反動、共和兩黨を制するに足るの地歩を得ることゝなれり。彼が終始自由主義の立憲政治家たりしは其性質及び教育に基く所多きこと勿論なるも然し彼は又之に因て伊太利革新家の人望をピエモンに集めて統一の業に資せんと欲したるなり。

(三) クリミア (Crimea) 戦争

軍紀は振肅し、財政は整備せり。商工業は興り、交通機關は通達せり。カヴールの公正と純潔と熱誠とは終に紛々擾々たる議會をして歸服せしめたり。内政萬端其緒に就きて彼が巨眼は今や其視線を海外に向つて轉ずるの時は來れるなり。彼が宛も善良なる保姆の如くに、匍匐へば立て、立てば歩めと保育したるピエモンは其丹青の効表れて人並に筋骨逞く成長したるなり。此後の彼が義務は此成人したるピエモンを世間に向つて紹介するにあり。孤弱なりと雖も伊太利半島尙ほ一の獨立國を殘して、統一の氣運未だ全く地を拂はざるを列強の間に知らしめざる可らず。彼は此目的を以て最も周到の注意を拂ひつゝ、靜に歐洲外交界の中心を望みつゝありき。

一八五四年は實に好個の機會を與へたり。事は暴慢なる露帝ニコラス(Nicholas)二世が「東歐の瀕死人」より其死に先ちて大なる遺贈を受けんとしたるに發したり。英佛は此瀕死の病者を助けて掠奪者を追はんとす。戰爭は破裂せり、英佛兩國

は同盟を奥普に對して求めたり。然れども普魯西は反つて露國に對して好意的中立をなし、奥太利は兩交戰國の間に立ち所謂「あちら立てれば、こちらが立たず」底の苦境に陥りて曖昧なる態度の内にて荏苒時日を遷延せんとせり。然も眞に露軍を制するの咽喉部はクリミア方面よりも寧ろダニエブ(Danube)にあり、同盟軍は如何にもして奥を誘はざる可らず、此に於てか兩國は苦肉の一計を案じ、奥太利の最も嫉視せる一國を導きて同盟軍に加はらしめんとせり。即ちナポレオン帝の密使ベルシニーはチエーリンに來つてピエモン王ビットリヲ、エマヌエルに謁し同盟加入を勸告せるなり。カヴールは盲龜が浮木に遇ひたらんが如き心地を以て此の勸告に應じたり。戰後の列國會議、ピエモン全權の出席、伊太利問題の提出、而して露に對する奥の不信、奥に對する英佛の激昂、奥の孤立、次で來る可き時運の趨勢を洞察すればピエモン前途は希望の光に輝かんとするなり。然れども此希望を實現せしめんが爲めにはカヴールは猶

ほ爲す可きの多くを有したりき。

果して奥太利はチエーリン談判の報に接して驚愕せり。奥太利は愈々窮餘の窮策に出で、更に英佛を説き、新なる議定書を設けて彼の四大保證を基礎に協議を遂げ、而して若し和議を定むること能はずんば「更に有効なる手段を取るが爲め此に關して協定をなす可き」を約せり。奥太利をして同盟を締結せしめんとする英佛は宛も泥中に鰻を捕へんとして焦るものなり。彼等は漸くピエモンの加盟を餌としてこれを得んとせり。然も狡猾なる奥は又も此「更に有効なる手段」云々と云ふ最後の一項を以て、ムルリと逃げたり。英佛も茲に至つて漸く奥太利が初めより露西亞を敵として戰ふの意なく、唯だ言を左右に托して同盟軍を瞞着し以て徒に時日を遷延せしむるにあることを知り。斯くの如くして一時奥太利の提案の爲めに立消えとならんとせるピエモンの同盟加入は奥の悖信と共に復も再燃して、一月二十六日英佛兩強と北伊の一小國ピエモンとは茲に同盟條約を訂結

せり。此條約はカヴールが最も苦心の跡を印したるものにして、終始外國の援助を仰ぎつゝも尙ほ自國を彼等と同地位に置き毫も其體面を傷けざるカヴールが得意の外交手腕は此時よりして發揮し初めらるゝなり。此條約に依れば、ピエモンは決して英佛二國に應援して露を打つものにあらず、二國と對等の權利の上に立ち、二國と等しく戰場に於ける功過を分つものにして、ピエモンの派遣せる兵員は二萬五千、而して之に要する經費は一時英吉利の支辨に俟つと雖も、此れ實に貸與を受くるに過ぎずして、不日ピエモン政府は此を英國政府に償還す可きの義務を有するものとすと謂ふにあり。カヴールは此同盟加入に承認を得せしむるが爲めには先づ議會と戰はざるを得ざりき。左黨及び革進黨は伊太利亡命客の聲援を得て切に今般の戰爭を以て非自由的のものとなし、伊太利の採れる在來の方針に反するものなりとなし、若し戰爭に加入すべしとせば寧ろ露を助けて土耳其を討つ可きものなることを主張せり。然れども鳩

鵬の徒には容易に大鵬圖南の壯舉を談る可らず、彼は暫く露國にして今日の戰に勝たんか、其權力は延びて地中海の上に及び、必ずやピエモンを脅すに至らんと謂ふ極めて單純なる論鋒を以て此に當り、漸くにして一八五五年二月十日、六十票に對する百一票の多數を以て此條約は代議院を通過せり。されど匿名投票の結果は僅に六十四票に對する九十五票を得たるに過ぎざりき、而して此兩者の差異は暗に反對説を持するもの多かりしと、カヴールが苦慮焦心議院操縦に盡瘁したることを表明するものなり。元老院に於ける投票は賛成五十二反對二十七、蓋し彼等はピエモンが同盟によりて得べき利害得失を打算して此に協賛せるにはあらずして寧ろ國王に對する尊敬心と、政府に對する信任との結果に出でたるものなり。

一八五五年四月ピエモン軍クリミヤに向つて進發す、精兵一萬七千七百六十七人、別に四千四百六十四騎、三十六砲を伴ふ。當初王弟ジエノア(Genoa)公之を統帥するの計畫なりしに、彼は不

幸談判中に病を以て逝きしにより陸軍大臣アルフロンソ ラ マルモラ(Alfonso La Marmora)代つて之が司令官たり。カヴールは掌に汗を握りつゝ、ピエモン軍の武者振り如何にと氣遣へり。宜なり彼が手鹽に掛けて育て上げたるピエモンは今や世界の活舞臺に立ちて其初役を勤めつゝあるなり。遮莫一八四八、九年の大屈辱とカヴール、ラ、マルモラ等が苦心とはピエモン兵を鍛上げて餘りありき。八月十六日チエルナヤ(Tchernaya)河外の戰に於ける彼等の活動は殊に目醒ましきものありき。消沈したる同盟軍の意氣は此有力なる援助を得て再び鼓舞せられ、土將オメル パシヤがダニユーブよりクリミヤに向ふの途次、二月十七日、露軍をウーパロターに要撃して奇功を奏し、更に進んでセバストポール(Sebastopol)に同盟軍を援くるに及んで戰爭熱は英佛の人士を浮かしめたり。英國に於ては平和論者のアベルシオン(Abercrombie)骸骨を乞ひ、熱心なる主戰論者パルメルストン(Parneston)は擧げられて首相の職に任じたり。

ピエモンは今世界に於ける有力なる一陸軍國として認識せらるゝに至りぬ。

親征せんとして親征する能はざる佛帝、益々出で、益々其陋を表したる奧太利、陽に虚勢を張りつゝ、陰に間諜を放つて自國の體面を損ずることなくして媾和を締結せんと努むる露西亞、斯くの如き間にセバストポールの運命は次第に傾き行きて九月九日、包圍を受けてより三百五十日初めて陥落するに至りぬ。戰將に終らんとして奧太利は初めて戰ふの決心をなせり。奧太利は愈々一八五五年十二月十六日を以て最後通牒を送り、翌年一月十七日まで其要求を容るゝの回答をなすにあらざれば、奧太利は斷然英佛二強と共に露と砲火を交へんとす。露は彼の屢狼群の襲來を叫ぶ少年の悪戯に慣れたる村民の如く此度も亦奧太利に開戦の眞意なきを信じて之に應ぜず。然れども戰爭中最も好意を表したりし普王フレデリック ウィリヤム(Frederick William)の切なる忠言を容れて一月十六日公然奧に覆牒して其要求に應ず可きを

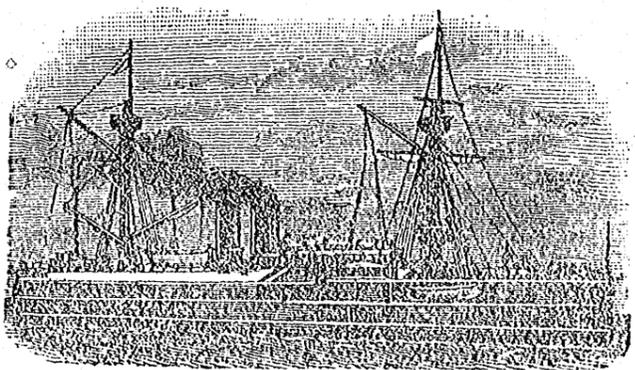
通告せり。平和は將に來らんとす、列國會議は開設せられんとす、而して吾がカヴールが鶴首して待ちたる千歳一遇の好機は最も近き將來に於て現はれんとするなり。抑も英吉利が列國會議説を提案したるは其意蓋し聯合軍に取りて最も強大なる敵たるクリミヤの嚴冬を和約の協議中に過し、若し談判破裂を見んか直に雪解と共に再び攻撃を開始せんとするに出でたるものなる可しと雖も、一方より之を見れば恰も天が特に伊太利統一の爲めに之を開きたるの觀あるなり。

奧太利は固よりピエモンが此會議に與るを喜ばずと雖も如何せん之を拒むの理由を發見すると能はず。此より先き一八五五年十二月の交、エマメエル王はカヴール及びマシモ、ドアゼグリヲ(Masimo D'Azeglio)を伴ふて巴里倫敦等西歐外交界の中心を歴訪して他日の基礎を固めたり。巷説傳へて曰く、女皇ビクトリヤ(Victoria)皇婿(Albert)と共に彼等を款待して後、傍人に談つて曰く「ピ

ツトリヲ、エスマエルは實に好個の武人なり、彼は猛虎とも鬪はん」と、女皇は更に此猛虎とも鬪ふ可き武人の側に、容姿老狸に似たる一壯漢の侍するありて、常に王を助けつゝあるを見しならん、然れども彼女は恐らく此壯漢が来る可き歐洲の外交壇に如何なる飛躍を試むるやを知ること能はざりしなる可し。

列國會議は一八五六年二月二十五日を以て彌よ佛都巴里に開かれたり。カヴールは心地よきアルプスおろしに送られつゝ、意氣揚々としてチユーリンを離れたり。

(未完)



前號 (第二卷 第五號) 目次

論 說	漢代の非官營論	田中萃一郎
	司法權の性質	泉二新熊
	上總介忠輝 (第三回)	阿部秀助
講 演	經濟雜感	添田壽一
時 評	布哇に於ける日本勞働者—工場法案と幼年工及び女工—	高橋誠一郎
	ブセン劇の試演—陪審制度と政友會—學政改革案の解決難—女學生と「可からず訓」—濱野先生の長逝	高橋誠一郎
雜 錄	獨逸の政變と財政改革	金 嶺 生
	米國に於ける國家權力伸長の由來	小 倉 和一
	ドルチエスタア事件とオーウエニズム	高橋誠一郎

次號 (第三卷 第二號) 豫告

論 題 未 定	福 田 德 三
同	林 毅 陸
同	堀 切 善 兵 衛
上總介忠輝	阿 部 秀 助